

---

# メイジVSウィッチ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイジVSウィッチ

### 【Nコード】

N2542P

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

拓樹と英美。この二人は何かにつけて何かある。お互いに仕掛けていることとは。ちょっと素直でない恋愛ものです。

## 第一章

### メイジVSウィッチ

長岡拓樹と山崎英美は非常に変わった関係である。

この学園においてだ。二人はその特殊な関係で有名であった。

「もうわかってるのにな」

「どっちもなんだろ？」

「そうだよな」

「それで何でなんだ？」

「どっちも言わないんだ？」

周りはこう言って首を傾げさせていた。

拓樹は薄い黒い眉が見事な鉤形になっており優しい一重の目を持っている。整った細い鼻を持ち唇は薄く口は大きい。顔は白く細い。

髪は茶色でかなり伸ばしている。

背は一七三程度である。その彼とである。

英美はだ。髪を一見すると首のところで切り揃えているように見える。しかし実際は後ろのところを少しだけ腰まで伸ばしている。それが二本の尻尾に見える。

顔立ちは目が大きくその目からは知的で凜としたものが見える。

口は小さくいつも余裕のある笑みを浮かべている。胸が大きくそれが制服の上からでもよくわかる。短い鮮やかな緑の制服のスカートから白い足が見える。

この二人は実は相思相愛である。しかしであった。

「二人共な」

「言わないままだからな」

「別に内気って訳じゃないんだろ？」

「ああ、それは違うな」

内気ということはすぐに否定された。

「どっちも結構積極的な性格だしな」

「山崎は何考えてるかわからないところあるけれどな」

「それでも内気じゃない」

「じゃあ何で言わないんだ？」

「それがわからないんだけれどな」

周りはこう言っつていぶかしんでいた。

そしてその一方である拡樹はだ。廊下で今日も相手を見ても知らないふりだ。互いを一瞬だけ見て少し口元を綻ばせるがそれだけだった。

「さてと」

「おい、何処に行くんだよ」

「それで」

「別に」

周りの声にもこんな感じである。

「教室に入るだけだよ」

「だからそういうのじゃなくてな」

「いいのかよ」

周りは止める顔で告げる。

「このままでよ」

「言いたいことわかるよな」

「何を言いたいのかな」

彼はとぼけた顔で周りに返す。

「それよりも授業がはじまるよ。行こうよ」

「おいっ、だからな」

「そういうのじゃなくてな」

周りが言っつてもだ。彼は知らないふりだ。

そして英美もだ。こんな態度であった。

「ではこれからだが」

「いいの？」

「長岡君は」

「長岡とは誰だ？」

澄ました顔での言葉である。

「それは」

「誰かもそうかもないじゃない」

「だからあんたも彼も」

「あれなんでしょ？」

「あれではわからない」

こう言うだけの彼女だった。

「何もな」

「どっちか言えば一発よ」

「相手の気持ちわかってるわよね」

「それは」

「さてな」

ここでもとぼける英美だった。

「何はともあれだ。いいか」

「いいかって何が？」

「何がなのよ」

「そろそろ授業だ」

彼女もこう言うのだった。

## 第二章

「学生の本分を果たしに行こう」

「全く。二人共何考えてるのよ」

「それで何やってるのよ」

周りにはそんな彼女を見ても言うのだった。

「一体。訳のわからないことばかりして」

「相思相愛だしわかってるんだし言えばいいのに」

「それで一発で話が終わるのに」

「何やってるのよ」

そんな二人の行動がわからないのだった。しかし二人はだ。お互いのことも気持ちもわかかっていながらだ。何故かどちらも動かない。ある日のことだ。英美は部活の剣道部の服で放課後の校内にいた。部活が終わってその服のまま作業をしていたのだ。

上下共に白の道着が実によく似合う。しかしである。

「何でまだ着替えないの？」

「道着でって」

「何でなのよ」

「うむ。何でもない」

こう言うだけの英美だった。そのうえでゴミ捨て場までものを捨てている。

そしてだ。そこにである。

拡樹が来た。彼もまた、であった。

部活のバスケット部のユニフォームでいた。他の者はジャージだといふのに彼女だけはだ。その服でこれまたゴミ捨て場にゴミを捨てていた。

「早く着替えればいいのにな」

「そうだよな」

「それで何でユニフォームのままなんだよ」

「意味がわからないな」

周りはそんな彼を見てこう話す。

「すぐに着替えればいいのにな」

「それでまだ着替えてないって」

「どうということなんだ」

「別にいいじゃない」

しかし本人だけは飄々としている。

「別にさ」

「まあそうだけれどな」

「それで誰か困る訳じゃないしな」

これは拡樹の言う通りであった。

「後で着替えればいいしな」

「それでな」

こう話して納得した。そしてだ。

ゴミ捨て場に行くのだ。相手もいた。剣道着とユニフォームの姿で合う。そこで目が合うがそれでもた。ここでもお互い何も言わなかった。

それでその場は先に剣道部の方がゴミ捨てを終えて去る。しかしであった。

また周りがだ。彼女に言うのだった。

「だからね」

「何も言わないの？」

「彼に」

「彼とは誰だ」

こう言うだけだった。

「私に何かあるのか」

「本当にわからない娘ね」

「何を考えてるのよ」

「わかってるのに」

あえて相手に何も言わない彼女にいぶかしむばかりであった。

そして拡樹もだ。周りに言われるのであった。

「いたぜ」

「挨拶もなしかよ」

「あの娘に」

「何がかな」

言っている人間が違っただけで言葉の内容は相手と同じである。

「それで」

「わかっていてわからないふりって楽しいか？」

「それってよ」

これが周りの言葉だ。

しかしだ。拡樹の顔は変わらない。それでいつものにこやかな笑みを浮かべたままだ。こんなことを周りに対して言うのであった。

「別に何もね」

「何も？」

「何もないっていうのかよ」

「そうだよ、何もないよ」

とはいっても思わせぶりな笑みである。



### 第三章

「だからさ。帰ろう」

「やれやれ、わからない奴だな」

「全くだよ」

「山崎さんもだけれどな」

「二人共な」

既に二人のことがわかっていてのことである。しかしその二人はあえて何も言わないのであった。そうしてであった。今度はだ。

夏の体育の授業の時だ。英美のクラスは水泳だった。それでプールで泳いでいた。

英美はその豊かな胸も見事なウエストもだ。全てを黒と青の競泳水着で包んでした。身体の後ろのラインもだ。実にいい。

「綺麗よねえ」

「完璧なプロポーションよね」

「胸は大きいし」

「お尻のラインだってね」

「そうか」

こう言われてもだった。英美は何とも思わない感じだ。

そのうえでプールサイドにいる。女の子達だけでなく男連中もだ。彼等もそんな彼女のスタイルに目が釘付けになっている。

「競泳水着って犯罪よね」

「体形出るからね」

「本当にね」

「特に英美みたいな娘が着るとね」

「水着はどれでもいい」

「こう返すだけの英美だった。」

「あるものを着るだけだ」

「その着たものが絶対に似合っつていうのがね」

「もうそれ自体が凄いいけれど」

「全く」

「それにしても」

ここで友人達は男連中を見る。するとだった。

彼等は女の子達を見ていた。そしてやはりであった。

彼等の中に彼もいた。しかし拡樹はだ。何でもない顔をしてそこに  
いるだけだった。男組はそんな彼に対してまた言うのだった。

「いいと思わないか？」

「なあ」

「どうなんだよ」

「さてね」

とぼけた声で返す拡樹だった。

「何が言いたいのかわからないし」

「だから山崎さんだよ」

「どうだよ、あのプロポーション」

「こっち見てるしな」

「そうなんだ」

実際に英美はプールサイドで立って顔を彼等の方に向けている。

そうしてそのうえでその場にその見事な全身を見せていた。

男組はそんな彼女を確かめてから彼に言うのであった。それでも  
だ。

「別にね」

「やれやれ、こんなのだよ」

「どうだよ、このサボテン具合」

「全くなあ」

「別にね」

やはり何とでもない調子の拡樹だった。

「とにかくさ。準備体操しない？」

「ああ、それか」

「それをか」

「うん。水泳は事前にそれをしておかないとよくないからね」

これはよく言われていることだった。

「だからね」

「まあそうだな」

「けれど後で先生が言うだろう」

「それでもだよ。ちゃんとしておかないとね」

こう言っただった。彼は立ち上がった。するとだ。

すらりとしてよく発達した身体が出て来た。黒いトランクスタイルの水着に包まれているだけのその身体はだ。実に見事なものだった。

そうしてだ。英美もそれを見た。それでもだった。

「ふむ」

「反応なしね」

「またしても」

「どういっつもりなんだか」

周りにはそんな彼女に呆れるばかりだった。立ったままの英美も準備体操をする拡樹もだ。やはりお互いに何も言わない。そして。

テストの結果が発表されてもだ。それを変えない。

## 第四章

学校全体でだ。拡樹は二十番だった。かなりいい方である。

「御前意外と頭いいんだな」

「勉強もできるんだな」

「そうだったんだな」

「最低限の勉強をしているつもりだけれどね」

彼はここでもこんな返答を出すだけだった。

「それだけだよ」

「まあ山崎さんへのアピールにはなるよな」

「だよなあ」

「その山崎さんも」

見ればだ。彼女は二十一番だ。ただし彼と得点は同じだ。

「やるねえ」

「文武両道の美女」

「しかもスタイルも完璧」

「凄いよな」

「で、御前もな」

また彼に話すのだった。

「釣り合ってるじゃないか」

「だからな。そろそろな」

「いいんじゃないのか？」

「だから言っている意味がわからないんだけれどね」

まだこう話す彼等だった。

「さて、それでだけれど」

「それで？」

「どうするんだよ」

「どうするってクラスに帰るんだよ」

それだけだというのである。素っ気無い口調だった。

「じゃあ帰ろうか」

「それだけか」

「全く。何時言うんだか」

「わからない奴だな」

「山崎さんにしてもな」

こうしたことが続いていた。そうしたある日だった。

遂に我慢できなくなった周囲がだ。それぞれ二人に言った。

「今日の放課後屋上だよ」

「いい？そこに来て」

「いいよな、そこだよ」

「わかったわね」

男連中も女組もそれぞれ二人に話す。そうしてであった。

その二人もだ。とりあえずは頷いた。

「わかったよ」

「屋上だな」

「ああ、そこだ」

「わかったわね」

こうしてだった。とりあえず二人をそこに行かせることは成功したのであった。そうしてその放課後であった。

放課後だ。彼等はそれぞれ屋上に来た。拡樹は右から、そして英美は左からだ。それぞれ入ってばったりという形で会った。

周りの面々はその二人をそれぞれ屋上の左右の出入り口の扉の向こうで見守っていた。とにかく二人を見ていた。

「これで告白するよな」

「絶対にどっちかがね」

「全く。お互いにアプローチ仕掛けて」

「何で言わなかったんだ？」

彼等にとつてもわかつていることだから余計にもどかしいことだったのである。

「しかしこれでやっと」

「どっちかが言うよな」

「ああ、言うよな」

「こうしたら」

こんな話をしながら二人を見ていた。そしてその二人は、青い空の下の屋上で向かい合う。まずはであった。

英美がだ。その口元に微笑みを浮かべて言った。

「さて、奇妙なことになったな」

「そうだね」

拓樹もこう返す。

「これはまた」

「この時だけじゃなくてね」

「一つ言っておく」

英美からの言葉である。

## 第五章

「私はだ」

「うん」

「自分の気持ちを言うことはどうもな」

「僕もなんだよね」

お互いに言い合う。

「だから。どうしてもな」

「そうだよね」

「しかし。こうなったのもだ」

「何かの縁だろうね」

二人は互いに微笑んでこう言った。

「だとすればだ」

「もうお互いにね。今までみたいなのはね」

「それはわかった」

「うん」

「しかしだ。どうもな」

「ええと、どっちが先に」

今度は二人共はにかんでしまった。どうにもこうにも何かが恥ずかしい感じだ。それで戸惑いながらだ。またお互いに話す。

「先に言ってくれ」

「いや、そっちが先に」

また互いに言い合う。今度は顔を赤らめさせながらだ。

「私に先に言わせるのか」

「そっちこそ」

「だからだ。私は言えないのだ」

「僕だってだよ」

今度もこんなやり取りをするのだった。

「うつむ、こんなことを言うのはだ」

「今までなかったしね」  
「それで男が先にだな」  
「レディーファーストじゃない」  
「しかしそれでも私は」  
「僕だつてその」

ここまでできてお互いに言えない一人だった。扉の向こうにいる面々はそんな二人を見ながらだ。どうにもこうにも齒がゆかった。

「だから言えばいいだろ」  
「言えれば終わりじゃない」  
「どっちでもいいから早くな」  
「言いなさいって」  
「一言でいいんだよ」  
「ほら、勇気を出してよ」

彼等にとつてはもうそれだけで済む話だった。しかしである。肝心の二人はお互いに顔を真っ赤にさせたまま中々言えない。その一言がだ。

「言ってくれ」  
「ああ、鳴かせてみたい不如帰」  
「ここで戸惑うかよ、あの二人は」  
「何考えてるのよ」

いい加減もどかしくなつて飛び出して二人に無理にでも言わせようと思いはじめた。しかしここで、であった。まさによつやくである。

「よし」  
「そうだね」

二人は遂に意を決した顔になつたのであった。  
「決めたぞ、いいな」

「うん、いいよ」  
「こうお互いに言つてであつた。そして。」  
「同時だ」



「そうだね、同時だね」

「二人同時に言えば問題はない」

「どっちが先にというのもないから」

「それでも。まだ言うのは恥ずかしいが」

「僕だってね」

それでもだった。二人にとってもこのまま何も言わないままでいるというのは辛かった。二人が最も緊張していてそれに耐えられなかったからだ。それで遂にであった。

「それでもだ。言っぞ」

「そうだね。じゃあ」

そしてだった。二人は二呼吸置いて。また言った。

「いいな」

「うん」

「一、二の三でだ」

「二人同時に言おう」

こう話してであった。

## 第六章

「いいな、今からだ」

「うん、じゃあ」

そして。

「一、二の

「三つ」

二人同時の言葉だった。今度もだ。

「好きだ」

「好きだよ」

まさに二人同時だった。遂にそれぞれ言った。

「交際してくれるか」

「一緒にいてくれる？」

またお互い同時に言った。するとであった。

まず英美がだ。赤く染まった顔で微笑んで返した。

「………いいぞ」

「僕でよかつたら」

拓樹も同じ表情で返した。

「どうもな。中々言えないでな」

「回り道ばかりしていたけれど」

「全くだ。魔法を掛け合わなくてもよかつたのにだ」

「つついね」

二人はその赤らんだ顔でこんな話をした。

「それでも。これで終わりだな」

「うん、一緒になろうね」

「勿論だ。さて」

「そうだね」

「これからは登下校はな」

「一緒に行き帰りしよう」

こんな話をした。

「まずはそこからだな」

「そうだね。そういうことでね」

こうして二人は一緒になってた。笑顔で抱き締め合った。青い空の下で。

そんな二人を見守る周りにはだ。やっとほっとした顔になった。

「本当になあ」

「ハッピーエンドだけれど」

「ここまですが長かったよなあ」

「全く」

それぞれ扉から離れてこんなことを話すのだった。

「っていつか何でだったんだ？」

「あそこまで長引いたのは」

「二人共本当にさつさと言えよよかったのにな」

「普段の積極さだね」

とにかく普段の二人を考えればありえないまでもどかしかったのである。

「それがここまですが長くなつてな」

「何でなのよ」

「つたくよ、何やってたんだよ」

「告白については」

しかしだ。ここでそれぞれこんなことを話す面々がいた。

「これは別なんじゃないか？」

「別物なんですよ」

「別物？」

「別物って？」

「だから恋のことはだよ」

「他のことは違つものよ」

こう仲間達に話すのだった。

「それでな。二人共ああして戸惑つてな」

「回り道ばかりしていたのよ」  
「それでか」  
「それでなの」  
「ああ、それでだよ」  
「だからなのよ」  
「気付いた面々がまた話す。」  
「二人共ああいうのはじめてみたいだしな」  
「それでなのでしょうね」  
「成程、それでか」  
「それでなの」  
他の面々もこれでわかった。  
「そういうことだったんだな」  
「恋愛には不慣れだったから」  
「恋は魔法だしな」  
「それにかかって。戸惑ってね」  
そしてこんな風にも言われる。  
「二人共拙い魔術師になつて」  
「で、ああなつたのよ」  
「魔術師ねえ」  
「じゃあ魔法使いと魔女？」  
「それか？」  
「それなの？」  
周りは今の言葉に反応を見せる。  
「あの二人つて」  
「それだったの？」  
「それでお互いに魔法をかけ合つて」  
「それでね」  
「こう話されていく。」  
「それでも最後の一押しができなくて」  
「ああなつていたのよ」

そうだったというのである。

「そういうことなんだろうな」

「それで今に至るのよ」

それでだと聞くとだ。周りは考える顔になった。

「何かそれ考えるとな」

「そうよね。あの二人って」

「本当に恋愛はウブなんだな」

「話を聞いているだけでもどかしくなるわ」

「しかしまあ」

「それでもね」

ここまで話されたうえでこうも話される。

「ハッピーエンドになったし」

「まあいいか」

「そうだよな。何だかんだで魔法は成功したし」

「だから愛は実ったしね」

皆それでいいとしたのであった。何はともあれであった。話はこれでハッピーエンドだった。拓樹も英美もだ。付き合うことになれた。

メイジVSウィッチ

完

2010・9・3

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2542p/>

---

メイジVSウィッチ

2010年12月1日20時55分発行